慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済価値論（二）
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.12 (1918. 12) ,p.1743(109)- 1755(121)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19181201-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

保證を有する者に在りては價値時差は勿論低きものなるも、博愛心に富める者は然らざる者に比し相對的に云へば價値時差低かる可し。諸學校に多額の金子を寄附して學問の進歩並に敎育の普及を促がし、又病院若しくは救貧設備の經費を負擔して細民の困苦を輕減せんと欲する者は財産の運用又は事業の經營等に依りて更に一層多額の收入を擧げ、得たる所を公共的目的に利用するを以て無上の快樂とせるが如し。

米國のカーネギー、ロックフェラ等の諸氏が勤儉己をを持し其蓄へたる巨萬の富の一大部分を割きて學校に寄附し、或は科學研究所を設立せるは此廣義の博愛心の發動に基るに外ならず。

以上内的原因及び外的原因の諸方面より個人間に於て何故に價値時差の等差を生ずるものなるかを論述せしが、各項に於て說明せる所は總て他の事情が全然同一なることを前提とせるを記憶せざる可らず。從つて、若し他の事情に相違あらば上記の推斷の適中せざることあるは勿論なりとす。例へば、或る獨身の富豪は係累者を有せざる點より云へば價値時差高かる可きも、收入の多額なる一事より之を觀れば時差は却つて低かる可し。而かも價値時差の等差を生ぜしむる原因は頗る多く、吾人の略叙せしものゝみにて十以上を數ふるを以て、價値時差の高低を定むる事情の組合は殆んど數ふる遑なき程多數に上るものなりと云ふを妨げず。されど假りに甲乙二人に就き極端なる場合を想像して、上記十二個の事情を左の如く組合することを得可し。

原因の種別		甲	乙
所得の大小	事情	大	小
所得内容の性質	價値時差	貨幣又は米	石材
將來の所得		減	增
所得の確實性		確實	不確定
年齡		壯年	老年
職業		安全	危險
體質		強健	貧弱
氣質		退嬰的	進取的
習慣		惡習なし	惡習あり
智識		有識あり	無智
家族		有	無
博愛心		深	薄
綜合		低	高

若し斯くの如き事情の下に生存せる甲乙二人の者ありとせば、甲の價値時差が乙に比して遙かに低かる可きは想像するに難からず。假りに、數字を以て其等差を示すとせば、甲の價値時差が一ケ年二分とせば、乙の率は四割五割又は十割にも上る可し。勿論、實際社會に於ては、此兩者の孰れにも相當する事情を有せる者は一人も無くして、皆な此中間に位せりと看做すを至當とす。而して各個人の事情の組合が甲の事情の組合に近ければ近きに從ひて其の價値時差低く、乙の事情の組合に類似すればそれ丈け價値時差高し。而して各個人が一定の時に於て有する價値時差は上記事情の組合せに依りて定まるものなるが、其組合は人に依り千差萬別なるのみならず各事情に在りても皆な其の程度を異にするは勿論なるを以て、一定の時に於ける一社會の各員の有する價値時差皆な其の程度を異にするは明かなり。

經濟價値論（二）

野村兼太郎

二

以下 Physiokrats 以後の價値論を論ずるに當つて、從來の如き歷史的叙述の煩を避けたいと思ふ。例へば Rousseau, Montesquieu 等が盛に自然主義を唱へた當時の佛蘭西の社會を背景とせる Physiokrats の價値論。英國に於ける產業

界の大變動と正統學派の價値論。殊に Ricardo のかの抽象的なる議論が意外にも當時の實際社會に決して緣遠いものでなく却つて密接なる關係あること等は、それだけでもすでに極めて興味の多い問題ではあるが、余が今まで歷史的叙述をなし來つた一つの理由は、其經濟價値論と雖も常に當時の社會思潮を背景に持てることを明かにしたいがためであつた。從來述べ來つた所は極めて疎雜不完全なものではあるが、略々其目的を達し得たと思ふから最早これ以上に歷史的叙述をするのは不必要である。其の上以下價値論を論じてゆく必然の過程として、隨時に是等の人々の說く所に觸れなければならない。從つて改めて個々各人に就て其價値論を說く必要を見ない。

前節以前に於て說き來つた所に依つても略々明かであるやうに、價値論には大體二種の異なつた傾向がある。即ち價値を認むる主體を基本とする主觀的價値論と、認めらるゝ客體を基本とする客觀的價値論とである。勿論一概に斯く二分するものゝ各々異れる論據に依つて種々違つた學說が說へられて居るが、余自身の信ずる價値論を述ぶるに先立つて、特にそれと最も關係あるものとして論じたいと思ふものは、前者にあつては限界效用 Grenznutzen を論據とするもの、後者にあつては人間の勞働を基とする所謂勞働價値說 Arbeitswerttheorie である。以下先づ勞働價値說とは如何なるものかに就て先學の述ぶる所を見、更に進んで勞働そのものが價値に對して如何なる關係を有するかに就て少しく余の考ふる所を述べて見たいと思ふ。

勞働價値論とは如何なるものを云ふか。

勞働を基とする客觀的價値論はすでに Physiokrats の中心人物たる François Quesnay の學說の內にもこれを見ることが出來る。勿論彼の主張するところはその生產的勞働の意義極めて狹く、明かに是を勞働價値說であると云ふことは出來ない。併し乍ら其價値說の根本に勞働を以つてして居ることは明かである。彼の一派が重農主義若しくは天則主義と呼ばれるやうに、彼は

"C'est le travail du cultivateur qui avai anéanties, mais encore celles qu'aneantissent toas les autres consommateurs. Au contraire, le travail de l'artisan ne lui procure qu'un droit de participer à la consommation des subsistances qui renaissent par le travail du cultivateur."

と主張して、其價値ある富 richesses の生產は一に農業鑛業等の勞働者に限るとした。

Quesnay 以下の Physiokrats は大略彼の學說を繼承する者であるから其價値論を見るの必要はない。勿論かの Gournay の如き其生產的勞働を多少廣義に取れる者もないではないが、未だ其色彩の明白なものであるとは云へない。

Physiokrats の影響を受けたが更に一層の貢獻を經濟學に與へた Adam Smith はその說くところ未だ純然たる勞働價値論とは云へないが、次に引用する二三の言葉を以てしても、彼が勞働に價値の根據を置いて居ることは明かである。

"The value of any commodity, therefore, to the person who possesses it, and who means not to use or consume it himself, but to exchange it for other commodities, is equal to the quantity of labour which it enables him to purchase or command. Labour, therefore, is the real measure of the exchangeable value of all commodities."

或ひは、

"The real value of all the different component

parts of price, it must be observed, is measured by the quantity of labour which they can, each of them, purchase or command. Labour measures the value not only of that part of price which resolves itself into labour, but of that which resolves itself into rent, and of that which resolves itself into profit."③

其外彼の大著 "Wealth of Nations" に現れたる他の言を以つてするも是を證するに足る。

Smith が勞働と價値との關係を更に一層強めた者は David Ricardo である。

"In the early stages of society, the exchangeable value of these commodities, or the rule which determines how much of one shall be given in exchange for another, depends almost exclusively on the comparative quantity of labour expended on each."④

而して其結論に、

"The value of commodities, therefore, depends principally on the quantity of labour required for their production; including in the idea of production, that of conveyance to the market."⑤

勿論彼は更に生產費の分析を續けて、其要素を一定にして普遍 constant and universal なものと臨時的 occasional なものとに分けて論じては居るが、生產費說たる彼の客觀的價値論の價値決定の一要素として勞働を認めて居ることは疑ない。

以上述べて來た英國正統學派の勞働價値論（Mill は生產費說なれば是を除く）は未だ徹底的に勞働を價値の唯一の源として居ない。最も徹底的に勞働價値論を稱へた者はかの Karl Marx である。余はこゝに Marx の價値論を充分に批判する餘裕も無く且つ充分なる準備を欠いて居

勿論彼も Smith と同じく "In the early stages of society." と斷つて居るが、其の論ずる所は Smith の說よりも更に明白に勞働が價値の根源たることを述べて居る。

Smith も "In that early and rude state of society which precedes both the accumulation of stock（この stock は capital の意味）and the appropriation of land"⑥ に於ては、勞働の分量が價値判斷の基本となることを論じて居る。

併し乍ら何れにしても彼等が價値の根本に勞働を認めて居ることは明かである。更に生產費說を主張する J. S. Mill も其價値の根本に於ては同じく勞働を以つてして居る。即ち彼は生產費を分析して曰く、

"What the production of a thing costs to its producer, or its series of producers, is the labour expended in producing it."⑦

るのは甚だ遺憾である。Marx を充分に理解するためには少くとも彼の名著 "Das Kapital" を熟讀する必要がある。併し乍ら今は次に引用する彼の言葉を以つてするも彼の價値論の大略を覗ひ得ると信ずる。

勞働價値論と一概に云ふけれども Marx の價値論と Ricardo のそれとは甚だ其趣を異にして居る。Marx は Ricardo よりも更に純粹に勞働即ち價値なりと云ふ立場に立ち、是を擴張してかの膨大な「資本論」を樹立した。彼は其の第一版の序文に於て價値問題に關して曰く、

"Die Werthform, deren fertige Gestalt die Geldform, ist sehr inhaltslos und einfach."

と云ひ、併も二千年來學者が價値問題の解決に苦しむ所以を述べて、

"Weil der ausgebildete Körper leichter zu studien ist als die Körperzelle. Bei der Analyse

der ökonomischen Formen kann ausserdem weder das Mikroskop dienen, noch chemische Reagentien. Die Abstraktionskraft muss beide ersetzen. Für die bürgerliche Gesellschaft ist aber die Warrenform des Arbeitsprodukts oder die Werthform der Waare die ökonomische Zellenform.[6]

即ち價値問題は經濟學上に於ける細胞の研究であつて、而も是を研究する方法としては唯抽象的力より外にないのであるから、其研究に非常な困難を感ずるのである。斯くて彼は其「資本論」第一卷に於て生產過程に於ける資本生產を批判し、價値問題に論及し交換價値 Tauschwerth と使用價値 Gebrauchswerth とを認め、更に價値と勞働との關係に就て曰く、

"Es ist also nur das Quantum geselschaftlich nothwendiger Arbeit oder die zur Herstellung eines Gebrauchswerths geselischaftlich nothwendige abstrakt menschlicher Arbeit bildet sie den Waarenwerth. Alle Arbeit ist andrerseits Verausgabung menschlicher Arbeitskraft in besondrer zweckbestimmter Form und in dieser Eigenschaft konkreter nützlicher Arbeit producirt sie Gebrauchswerthe."[7]

彼は此の勞働價値論より進んで彼自身の餘剩價値論——即ち費した價値とそれより大なる新しく形成された價値との差を餘剩價値となし、これを生ずるは唯勞働に依つてのみなされる。——を說いて居る。併し今は Marx の餘剩價値論の正否を檢しやうと云ふのではない。彼が其餘剩價値は流通行程に於て生ずるものでないとした矛盾を攻擊しやうとするのでもない。唯彼が geselschaftlich notwendiger Arbeit 若しくは Arbeitszeit を基礎として其の價値論を建設したことを明かにすれば足りる。[8]

以上說明して來たことに依つて大略勞働價値論の何ものであるかゞ解つたと思ふ。現今に於ては殆ど此の勞働價値論を信ずる者はない。余と雖も勞働價値論の全部を是認する者ではない。殊に Marx の如く勞働即價値を稱ふることは全然反對ではあるが、今日主觀派の諸學者が說く如く全く誤謬として棄てゝしもうべきであらうか。冠履顚倒の論なりとして破棄すべきであらうか。以上述べた諸學者の說は全然誤であらうか。價値判斷の根本に勞働を置ける價値論は何等の眞理をも含んで居ないのか。余は直ちに是を肯定し得ない者である。價値そのものゝ根本を穿鑿する時に、そこに眞理の一面を認める。こゝに於て議論は第二の問題に移る。

勞働は如何なる點に於て價値論の根底に觸れるか？

Arbeitszeit, welche seine Werthgrösse bestimmt. Die einzelne Waare gilt hier überhaupt als Durchschnittsexemplar ihrer Art. Waaren, worin gleich grosse Arbeitsquanta enthalten sind, oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Werthgrösse. Der Werth einer Waare verhält sich zum Werth jeder andren Waare, wie die zur Produktion der einen notwendigen Arbeitszeit zu der für die Production andren notwendigen Arbeitszeit. 'Als Werthe sind alle Waaren nur bestimmte Masse festgeronnener Arbeitszeit.'"[9]

續いて彼は財に於て表現された二重の性質に就て論じて曰く、

"Alle Arbeit ist einerseits Verausgabung menschlicher Arbeitskraft im physiologischen Sinn und in dieser Eigenschaft gleicher menschlicher oder

註一、Quesnay:— Dialogue sur les Travaux des Artisans.（前掲 Kaulla の著書一二四頁より引用）

註二、Adam Smith:— The Wealth of Nations.(Economic Classics. ed. by Ashley.) p. 30.

註三、同上 P. 47.

註四、Ricardo:—Political Economy.(ed. by Conner.)P. 7.

註五、Smith:— W. o. N. P. 42.

註六、J. S. Mill:— Principles of Political Economy. (ed. by Ashley) PP. 457-8.

註七、Marl marx:— Das Kapital. Fünfte Auflage. S. V. f.

註八、同上 S. 6.

註九、同上 S. 13.

註一〇、Marx に關しては福田博士の諸著「續經濟學研究」「勞働經濟講話」等に負ふ所多し。

四

余は今勞働と價値との關係を述ぶるに先立つて、福田博士が其の著「勞働經濟講話」に於てMarx の價値論を批評せられ冠履顚倒の論なりとせられた一節を引用したい。

「若し勞働の分量が價値を定むと云ふのが正しいなら、其と同じく支拂ひたる貨幣の額即ち價格が物の價値を定むと云はねばならないのです。其れは冠履顚倒です、物に價値があるから貨幣の一定額を價格として支拂ふので、貨幣の一定額を支拂ふから、價値が生ずるのでありません。勞働を費して生産する其物に價値がありますから、我々は之に勞働を費し、苦痛を伴ふ力作を代價として支拂ふことを辭せないのであります。」(1)

此の點より見れば價値は費されたる勞働でないことは明白である。金鑛を採掘し精錬するのは其勞働に依つて得らるゝ筈の純金が、金鑛よりも價値が大であると云ふことを豫想するからである。織工が機を織るのは織られて出來た布がもとの絲よりも價値が多いと云ふことを知つて居るからである。即ち勞働が價値の源ではなくて、價値が勞働の源である。併し乍ら價値は勞働に依つて創造されるのである。金鑛が幾らあつてもそれは純金とは違ふ。金鑛が純金になるには如何しても採掘精錬等の勞働をしなければならない。勿論天然自然に風雨等のために偶然金鑛が純金にならないとも限らない。併しそれは極めて稀有の例である。且つさう云ふことが例外でないとするなら純金と云ふ自然的價値を更にそれよりも價値の多い裝飾品等の價値にするには加工等と云ふ勞働を加へなければならない。即ち自然も價値を增進することはあるがそれは何等價値を增加させやうと云ふ意思があつてすることではない。併るに勞働は價値を增進させやうと云ふ目的を以つて價値を增進させるのである。而して前者の價値と後者の價値とは常に異なつて居る。絲としての價値は性質上布としての價値とは全く異なつて居て、絲はこれに織ると云ふ勞働の加らざる限り布となり得ない。余はこゝに於て佛蘭西の哲人 Henri Bergson の言葉を想起する。

"Que des choses nouvelles puissent s'ajouter aux choses qui existent, cela est absurde, sans aucun doute, puisque la chose résulte d'une solidification opérée par notre entendement, et qu'il n'y a jamais d'autres choses que celles que l'entendement a constitu-ees..... Mais que l'action grossisse en avançant, qu'elle crée au fur et à mesure de son progrès, c'est ce que chacun de nous constate quand il se regarde agir. Les choses se constituent par la coupe instantan'ee que l'entendement pratique, à un moment donné, dans un flux de ce genre,....."(2)

我々が絲を布とし布を著物にして行く一切の過程に於て、絲、布、著物、等が忽焉として生じたのではない。絲から布、布から著物と生産されて

行く間には、時間と云ふ觀念の下に新なる價値が創造されるのである。而して新なる價値の創造換言すればより高き價値の創造はある目的 Zweck を豫想する。ある Idee を豫想する。而して其過程の中間に於て靜止的狀態となして眺めた時、それが絲であり布であり着物である。絲は布になさんとして造られ、布は着物になさんがために造られ、着物は人間が之を着て身體を保持するを第一の目的として造られる。人間の生存維持。一切の經濟的活動は先づ是を目的として始まる。又同時に是を前提としてのみ起り得る。基督の犧牲は宗敎上より見れば偉大なる價値があるだらう。併し經濟的立場に立てば何等の價値もない。基督が生存して大工でもして居たら經濟的價値には貢獻をしたらう。併し生存は吾人が更により高き價値に參與する前提に過ぎない。故に基督の死そのものにはたとへ

經濟的價値が無くとも一向差閊はない。そこには經濟價値とは全く異なる偉大なる宗敎的價値が存する。併し乍ら吾人が經濟價値を論ずるには先づ其根底に生存を豫想しなければならない經濟價値の增進は人間の生活を物質的に改善してゆくのである。經濟價値は常に生存に附隨する。

Fichte は其著 "Der geschlossne Handelsstaat." に云ふ。

"Der Zweck aller mengchlichen Thätigskeit ist der leben zu können; und auf diese Möglichkeit zu lben haben alle, die von der Natur in das Leben gestellt wurden, den gleichen Rechtsanspruch."[3]

と生存を主張して、

"Jeder will so angenehms leben, als möglich: ..... Es muss nur an ihm selbst liegen, wenn einer unangenehmer lebt, keinesweges an irgend einem andern."[3]

と倫理的歸趣を見出して居るが、出來る限りの愉快な生活とは單なる享樂の世界ではなく、更に大なる價値を創造する努力の生活である。"Leben und leb:n lassen!" と叫ぶは Idee に參與せんと欲する "alle menschliche Thätigkeit." の根本的要求である。此の生存の過程に於てより高き文化價値 Kurturwert に到達せんと欲する努力は經濟上に於ては勞働である。

"Labour is the painful exertion which we undergo to ward off pains of greater amount, or to procure pleasures which leave a balance in our favour"[3]

とは偖りに心理的過ぎたる解釋ではあるまいか。苦痛を去り快樂を得んとする力作は其根本に於てはより高き經濟價値に到達せんとする力作ではないのか。時とすればある個人は一生苦痛を感じながら而も彼は價値增進に多大の貢獻をなして居ることがある。即ち勞働とは經濟價値を創造して行く過程に於ける力、換言すれば創造的の力 Creative power である。從つてそれが精神的であると肉體的であるとを問はない。無用煩雜な分類は學問上より見ても不用である。唯常により高き經濟價値と云ふ在外目的 ulterior or exterior object に到達せんとする努力である。故に同じく讀書と云ふ行爲でも、讀書すると云ふことそれ自身が目的である場合には勞働ではない。即ち在內目的 Interior object のためにするものは遊戲である。若し讀書それ自身が目的でなく例へば他に讀書すれば報酬を與へられると云ふが如き目的がある場合には明かに勞働である。最も適例として人の漸々引用するものはかの登山者と强力、銃獵家と獵師等の對象である。併し乍ら此の在外目的は貨銀とは云へない。今日の貨幣經濟時代にあつては一見恰も貨幣を

目的として勞働するやうに見えるだらう。併し貨幣を得んとする努力は其貨幣にて自己の生活を保持し且つ現在より高き文化生活に生きんと欲するがためではあるまいか。即ち前にも述べた如くより高き經濟價値に到達せんとするのではないのか。絲を布にする職工はたとへそれを賣つて貨幣を得なくとも彼の力作は勞働であつて遊戲ではない。若し彼が唯絲を織ると云ふそのことが目的であつて布が出來やうが出來まいが彼にとつて何等の關係もないとしたら、それは遊戲であつて勞働ではない。强力が登山者を連れて行く時は恰も賃銀を得ることを目的として居るやうに見えるが、事實は彼の生活を維持し向上せんがためである。山樵が樹を切るのは必ずしも是を賣るためではなく、よしそれを賣らなくともそれは明かに勞働である。斯くの如き勞働は現在の如き貨幣經濟時代にあつては全然不問に附して差閊ないものであらうか。人間の經濟活動は貨幣を目的とし貨幣に終るべきものであらうか。余は斯くの如く經濟學の水平線を低下するの必要を見ない。外面的に於て勞働はより高き文化生活に到達せんとするあらゆる力作 Exertion である。內面的に於て勞働は經濟價値の創造力である。

余は斯くの如き見地よりしてのみ、經濟と倫理との關係を妥當に說明し、更に兩者の價値關係を明かになし得るを信ず。而してこゝに生存權 Droit à l'existence. 及び勞働權 Droit au travail の理論的根據を發見し得るのではあるまいか。

以上述べ來たつたところに依つて、勞働は經濟價値の源泉ではないが、文化的生活 Kultur Leben に於て經濟價値は常に勞働に依つて創造されると云ふことが明かになつたと思ふ。此の斷定の前提には一の Apriori が置かれてある。即ち勞働は前述の如くより高き一つの價値を豫想してこれに到達せんとして費されるのである。故に如何なる勞働も常にその到達せんとする價値を前提とする。絲は布に達せんとする目的で織られるかも知れないが、斯くして達せんとする目的の終局に——人類の文化生活を向上せしめんとする絕えざる欣求の對象に一の Apriori が存して居る。此のことに關してはこゝではこれ以上觸れる必要を見ない。

余は以上勞働は如何なる點に於て價値論の根底に觸るゝかの問に答へながら、勞働の意義を說いた。併し乍ら未だ經濟價値そのものには少しも觸れて居ない。それのみならず、三大經濟基礎權若しくは社會權と稱せらるゝ生存權、勞働權、勞働全收權 Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag. が經濟價値に對する關係も未だ明瞭でない。これ等の權利が經濟基礎權であると同時に經濟價値に於てもその根本をなすものであるから價値論を論ずるに當つて忽諸に附すべきものではない。此等の問題は次に最近經濟價値論の代表說たる主觀派價値論の主張するところを一見し、再び價値論の根本を述ぶる際に讓つて、こゝには單に勞働價値論に依つて重要視されたる勞働そのものは、其根本に於ては尙ほ依然として一の眞理の存することを述ぶるに止めて置く。

註一、福田博士「勞働經濟講話」八一六頁、

註二、Bergson :—L'évolution Créatrice. Septième édition. PP. 270—1.

註三、Fichte :— Der geschlossne Handelsstat. (1801.) S. 14 f.

註四、W. S. Jevons :— The Theory of Political Economy. 4th ed. P. 167.

（未完）